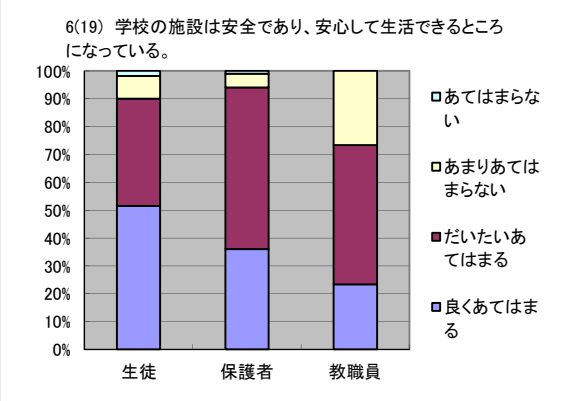
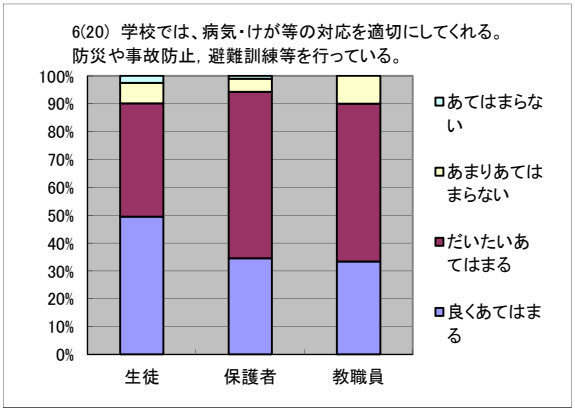
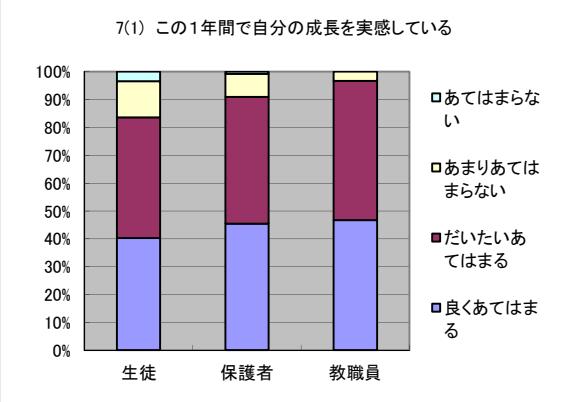


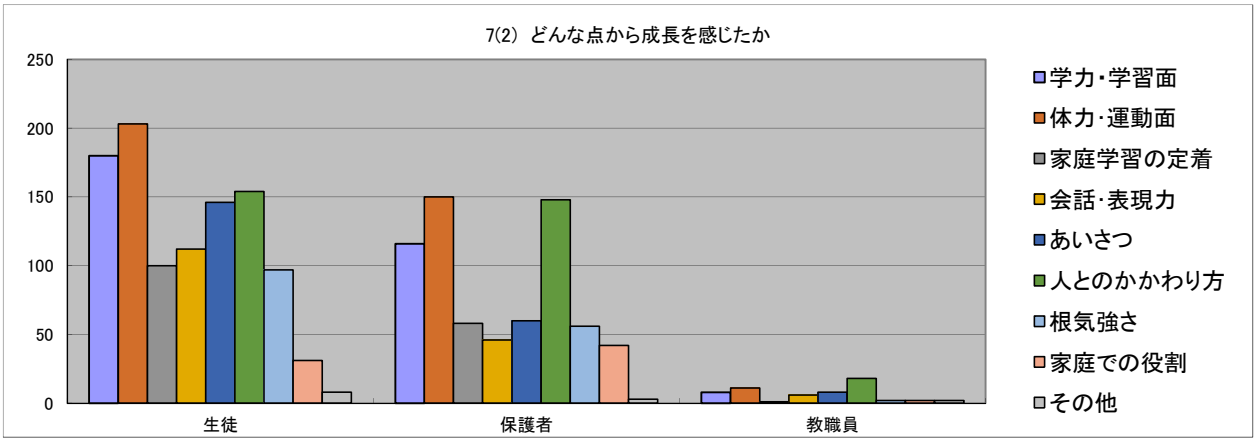
生徒及び保護者の「良くあてはまる」「だいたいあてはまる」がほぼ9割を超える数値となっている。
危険個所があれば，即座に教職員が対応し，危険な個所からは回避させる生徒指導が定着・浸透してきているためである。しかし，教職員の「あてはまらない」の割合が大きい理由については、校舎の老朽化等が進み指導や自助努力の範囲を越えているためである。



けが・病気の対応は，学年を問わず，全職員が養護教諭と連携をとり適切な対応ができていることが明らかになった。
災害時の対応については，避難訓練を通して非常時の安全確保，連絡体制，教職員の役割等を再認識できた。
また交通安全教室を通して、身近な危険は何があるかを確認し、事故防止の意識を高めることもできた。



生徒の8割、保護者の9割が「あてはまる」という高い割合になった。特に、生徒、保護者ともに体力運動面の成長を認めるものが多い。
生徒は、2，3年では学力学習面の成長をあげる割合が顕著。
保護者は、人の関わり方の成長をあげている。
一方両者とも低い割合は家庭学習の定着である。この定着に向けて、具体的な取り組みを考えなければと思う。



三者ともに「学力・学習面」、「体力・運動面」について、特に成長を感じている割合が高い。「学力・学習面」は学年によって感じ方は違うが、3年生は進路に向けての気持ちが表れていると考えられる。1年生では、小学校からの学習環境が大きく変わり、学習への意識、テストへの関心が高くなっていることが表れている。
「体力・運動面」は、身体や心の健全な発達とともに、部活動や保健・体育などの活動を通し、その成長をしっかりと実感していることが表れている。
また、三者とも「人とのかかわり方」について、成長を感じており、仲間づくりや、人への思いやり、居心地の良い学級づくりや、学校づくりが根付いてきていることがわかる。この点については、特に、保護者が一番成長を感じていることから、学校と家庭・地域が信頼関係にあると評価できる。